
マクロスF～深緑の継承者～

紅神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マクロスF 深緑の継承者

【Nコード】

N5298I

【作者名】

紅神

【あらすじ】

西暦2059年

マクロスフロンティアは謎の巨大異星生命体バジラの襲撃を受けた。

その混乱の中、S・M・Sのバルキリーパイロットの“シオン・リン・ディランディ”は

逃げ遅れていた少女“ランカ・リー”を助ける。

その出会いをきっかけに、シオンの運命が動き出す……

第0話〜プロローグ・オブ・セブン〜（前書き）

この小説は、マクロスFにオリジナル主人公による本編再編成の小説です。

原作ヒロインキャラとオリジナル主人公にフラグが立ちます。上記のことに不快に感じる方は戻ることをお勧めいたします。

第0話 プロローグ・オブ・セブン

西暦2058年

第55次超長距離移民船団マクロス？フロンティアに向けて、
第37次超長距離移民船団マクロス7から一機のバルキリーが飛び
立とうとしていた。

「じゃあ、お世話になりました。ライルさん」

バルキリーに乗る青年“シオン？リン？ディランディ”は、
叔父である“ライル・D・ジーナス”に別れを告げていた。

「ああ、向こうに行っても頑張れよ」

「はい、エミリアさんとラミアによろしく言っといってください」

「おいおい、エミリアはともかくラミアは勘弁してくれ。

お前のこととなるとなんでも仕出かす子だぞ？」

そんなライルの言葉にシオンは苦笑しながら答えた。

「すみません…でも、あいつに言ったら、絶対ついて来そうだった
もんで……」

確かにそうだなとライルも苦笑しながら答えた。

「それじゃあ」

「いつてらっしゃい、シオン」

「……いつてきます」

シオンは通信を閉じて発進準備に入った。

「さて、長旅だ……行こうか相棒！」

「リョウカイ、リョウカイ!!」

コックピット内の特殊に改造された場所にいるオレンジ色の丸い相棒である

“ハロ”に話しかけながら準備を整えた。

「シオン・リン・デイルンディ、シュトゥルムボーゲル？カスタム、発進する!!」

シオンの乗る機体、VF-222Sシュトゥルムボーゲル？カスタムはマクロス7船団から飛び立った。

「フロンティアか。ミシエルとクランは元気になっているかな？」

故郷にいる幼馴染たちのことを考えながら、シオンは長距離フォルドに入った。

物語はこの1年後、西暦2059年

深緑の後継者が1人の小さな歌姫と出会った時から始まる……

これは深緑の継承者と少女たちが織り成す

世界や銀河を巻き込む大きな恋の物語

第0話〜プロローグ・オブ・セブン〜（後書き）

初めまして、こんにちは。

紅神と申します。

今回からこの場を借りて小説を書かせていただきます。

なるべく早く更新できるようにしていきたいと思っておりますので
最後までお付き合い下さるととてもうれしいです。

よろしく願います。

第1話〈クロス・エンカウンター 前編〉（前書き）

この小説は、マクロスFにオリジナル主人公による本編再編成の小説です。

原作ヒロインキャラとオリジナル主人公にフラグが立ちます。上記のことに不快に感じる方は戻ることをお勧めいたします。

第1話 クローズ・エンカウンター 前編

あれから1年、シオンは美星学園高等部航空科パイロット養成コースに編入していた。

そこで、幼馴染のミハエル・ブランと再会したり、その再会のせいでもう一人の幼馴染であるクラン・クランとも再会したりしたが、その話はまた別の機会にしよう。

シオン・リン・ディランディは音楽を聴くのが好きである。

叔父や叔母がミュージシャンだったこともあり、マクロス7に暮らしているときはいつも聴いていた。

その日もいつものように、美星学園の屋上で愛用のヘッドフォンで音楽を聴きながらハロと一緒にEXギアの調整をしていた。

「信じられないですよ！当日になっていきなり演目の変更なんて……」

そんなシオンのそばで、ルカ・アンジェローニは頬を膨らませながら不満を言っていた。

「ま、しょうがない。それがお仕事ってやつだ。向こうさんしてみれば、学生パイロットごときがアクロやって、何かあったら大変

だ、ってことだろ」

シオンの隣にいたミハエル・ブランは、ルカに対して冷静に言った。

「でも、更衣室までないんですよ！？全部シェリルのバックヤードにするからって……僕らだってスタッフなのに……！」

「ルカ、仕方ないことだろ？相手は、あのウルトラスター様なんだから……」

ヘッドフォンを外しながらシオンがルカに言った。

「だからって、アルト先輩のコークスクリューを外すなんて！」

「いいさ」

三人から少し離れたところでEXギアの調整をしていた早乙女アルトは面白くなさそうにそう答えた。

「でも」

「どうせ2000も飛んだら行き止まりの空だ。たかが知れてる」

そう言って、アルトは屋上に設けられてるリニアカタパルトのほうに向かって行った。

「北北西の風。秒速四メートル……いい風だ」

アルトはリニアカタパルトにEXギアを装着して発進の体制をとった。

「ア、アルト先輩？」

「おい、姫！」

「テイクオフ！」

ルカとミハエルの言葉を無視してリニアカタパルトはアルトの身体を撃ちだした。

そのまま、上昇気流にアルトは雲の上まで飛んで行った。

「風に乗った」

「つたく、歌舞伎上がりのくせに……」

ルカとミハエルは、そんなアルトの姿を見て感心していた。

「こんな限界のある空……飛んだってつまないだろ……」

「ツマンナイ、ツマンナイ」

飛んで行ったアルトの姿を見ながらシオンは眩き、ハ口はそれに同調していた。

「何か言ったかシオン？」

「何でもないさ」

ミハエルの問いにシオンは何もなかったように答えて作業に戻って

いた。

「しかし、こんなところで着替えさせられるなんて……」

銀河の妖精“シェリル・ノーム”のコンサートの当日、更衣室を与えられなかったシオンたちは、会場近くの林の中で着替えをしていた。

「いつまでむくれてるんだアルト？」

シオンは、紙飛行機をいじりながら不機嫌な顔をしているアルトに話しかけたが、うるさいと一蹴りされてしまった。

「シオンの言う通りだ。そんなにむくれてると、せつかくの美人が台無しだぜ？」

文句があるなら、次はトップになれよ。万年二位のアルト姫」

「くっ、ミハエル……！」

ミハエルがアルトをおちよくり、そのまま、会場に向かった。

「僕、見たかったのになあ。アルト先輩のコークスクリュウ……」

「さつきも言っただろ、2000も飛んだら行き止まりの空だ。たかが知れてる……俺はここにいたくないんだ。こんな、息がつまる場所に……」

そう呟きながらアルトは着替えを始めた。

「それじゃあ、僕は先に行ってますね」

そう言つてルカはEXギアを会場に走らせて行つた。

アルトが着替え始めたのを見てシオンもEXギアを取り出して着替え始めた。

「急がなきゃ、急がなきゃ！」

二人の後ろの方から緑の髪をした女の子が走ってきた。

しかし、運悪く女の子の足元にあったスプリンクラーが作動してしまった。

「うわぁ！痛ぁ……やっちゃった……ビショビショ……」

スプリンクラーの水に驚いてしまつて女の子は転んでしまい、水でビショビショになってしまった。

「！？」

シオンは、後ろから聞こえた声に驚いて女の子の方を見た。

「アルト、先に行つててくれ」

「おい、シオン！」

アルトは女の子の方に近付いて行くシオンの肩を掴んで止めようとした。

「なに、すぐに行く。お前は先に行って俺が遅れた時の言い訳を考えててくれ」

「あ、ああ」

アルトは、そのままEXギアを着け終わらせて会場に向かった。

そんなアルトを見送ったシオンは、女の子に近付き手を差し伸べた。

「大丈夫か？」

「！？……かつこいい」

「はあ？」

シオンの顔を見て顔を赤らめながら何かをつぶやいた女の子にシオンは擬音符を浮かべていた。

「な、何でもないよ！！」

そう言いながら、女の子はシオンの手を取った。

「ありがとう。もう、ライブいけないかと思っちゃった……」

シオンは、女の子に自分の服を着せて、EXギアのエンジンで女の子の服を乾かしていると女の子がお礼を言ってきた。

「いいさ、これくらい男として当然だ」

服も乾かし終わり、シオンと女の子は一緒に会場に向かっていった。

「なんで、こんなところにいたんだ？ライブに行くんだっただろ？」

シオンは、ふと疑問に思ったことを隣を歩いている女の子に聞いてみた。

「道に迷っちゃって……それで、木の上からならわかるかなあって」

「……ぶ、アハハハハハ！」

シオンは、女の子のあまりにも古典的な考えに思わずふき出して笑ってしまった。

「む、バカにしてる……？」

「ククク、いや、あまりにも単純でかわいい考えだと思ってな」

「かわっ……!!」

笑いながら言ったシオンの言葉に女の子は顔を赤くして俯いてしまった。

「どうした？」

「な、なんでもないよ!!」

いきなり俯いてしまった女の子を心配したシオンが顔を覗き込むと女の子はビックリして手を振ってそう言った。

「そうか…？おっ、着いたぜ」

二人は話をしてる間にライブ会場に着いていた。

「わぁ〜!!」

女の子はうれしそうにライブ会場を見上げていた。

「ありがとね、案内してくれて」

「いいさ、どうせ行き先が同じだったんだから」

「そうだ、今度お礼するね。あたし、娘々でバイトしてるから来てっ！」

女の子はシオンの前に出て顔を見上げてそう言った。

「にゃ、にゃん…にゃん？」

「にゃんにゃん にゃんにゃん にーはお にゃん ゴージャス
デリシヤス デカルチャー。ってCM知らない？」

振り付けを付けて女の子は娘々のCMの歌を歌ってくれたが、シオンはわかっていなかった。

すると、女の子のポケットから音が鳴り女の子はそこから携帯らしきものを取り出し慌てだした。

「ああ！もうこんな時間！！」

そう言っただけの子は走り出した。

そして、シオンの方に振り返り、

「必ず来てね！待ってるよ！」

と手を振りながら言っただけの方へと行ってしまった。

「面白い子だったな……」

シオンは移動しながら先ほどの女の子のことを考えながら笑っていた。

未だその片鱗を見せない小さな歌姫は深緑の後継者と出会う

その出会いは必然であり運命

そして、物語は次のステージへと進んでいく……

第1話〈クロス・エンカウンター 前編〉（後書き）

お久しぶりです、紅神です。

時間がかかってしまいましてすみません……

次は、早く書けるようにがんばります。

さて、今回は主人公と原作ヒロインの会合でした。

この出会いにより、いろいろと物語が変わり始めていきます。

それではまた次回お会いしましょう。

第1話〈クロス・エンカウンター〉 後編〈（前書き）

この小説は、マクロスFのオリジナル主人公による本編再編成の小説です。

原作ヒロインキャラとオリジナル主人公にフラグが立ちます。主人公の介入により、スカル小隊の番号が若干ずれております。上記のことに不快に感じる方は戻ることをお勧めいたします。

第1話 クローズ・エンカウンター 後編

「遅かったな、シオン」

会場に着き、すでにスタンバイをしていたミハエルにシオンは声をかけられた。

「ああ…、道案内をされていてな…」

「さすが騎士シオン様だな。やることが違うよ」

「ミシエル、その呼び方はやめてくれ。騎士なんて俺には合わない…」

「そう言っなよ。ピッタリだと思うぞ」

「二人とも、静かにしてください。はじまりますよ」

会場の照明が落ち、会場が静まりかえった。

「私の歌を聴け…!!」

シエリル・ノームの掛け声とともに、会場のボルテージが最高潮に達した。

歌が始まり、それと同時にシオンたちも色とりどりのスモークを出しながら飛び立った。

「遅れてるぞ、ランキ！」

「そのまま行けよ！」

次々と変わっていく会場の背景の中をシオンたちは飛行していた。

しかし、歌が中盤に差し掛かってきた時、その連携が乱れてきた。

「おいアルト！いい加減にしろ！」

「喜んでるだろ？客。このままいくぜ、レイフォーク・コークスクリュー！！」

「おいつ、アルト！」

「やりすぎだぞ！」

「いつけえええ！」

ミハエルとシオンの制止を無視してコークスクリューの態勢に入った。

「ビビんなよ、妖精さん！」

しかし、回転しながらランキのEXギアの上を通過しようとしたアルトだったが、

アルトの行動に驚き操縦を誤ってしまったランキのEXギアの羽とアルトのEXギアの羽が接触してしまい、アルトはバランスを崩しステージに突っ込んで行った。

「ちっ、ミシエル！フォーメーション△だ！俺がフォローに入る！」

「了解だ！しくじるなよ！」

アルトを追ってシオンもステージに向かっていった。

アルトが近づいた風圧により、シェリルがバランスを崩してステージから落下してしまった。

「間に合わないっ！！」

「何やっているんだアルト！！」

アルトを追い越して、ギリギリのところでシオンがシェリルをキャッチした。

「大丈夫か？」

「え、ええ、ありがとう」

「いけるか？」

「当り前よ！」

笑いながら言ったシオンの言葉にシェリルはそう答えた。

「いくぞ、アルト！」

「あ、ああ！」

シオンは、シェリルを抱えながらアルトと一緒に飛び上がった。

シェリルはシオンに抱えられながら歌い続けていた。

「よし、全機あいつらのフォローを！」

シオンとアルトの周りにミハエル達のEXギアが集まりフォーメーションを組み空中を舞った。

「さすがだな。あのトラブルにも動じないなんて」

曲も終り、シェリルをステージに下ろしたシオンは空中からステージを眺めながらつぶやいていた。

そして、会場を見渡していると、本番前に出会った子を見つけた。

「あの子……」

楽しそうにライブを見ている女の子を見ながら、シオンは優しく笑っていた。

ミハエル達の待つステージの上に向かっていく時、いきなり会場に明かりがついた。

「！！！」

そして、シオンの携帯が鳴った。

「はい、こちらスカル4」

『シオン、ヴィクター3が発令された！至急S・M・S・に來い！』

「了解！」

ミハエル達の方を見るとちょうど飛び立つところだった。

シオンはミハエル達を追いかけるように飛び、スピードを上げた。

「守らなきゃな……そのために、狙い撃ってやるさ」

S・M・S・に着いたシオンは、急いで自分の機体へと走った。

機体の元へと着き、そのまま機体へと乗り込んだ。

「整備班どいてろ！ハロ、出撃するぞー！」

「リョウカイ、リョウカイ！」

シオン専用に改造されたコックピット内に設置されているハロが耳をパタパタさせながらそう言った。

「スカル4、シオン・リン・ディランディ出撃するー！！」

シオンの乗るバルキリー、VF-25Dメサイアが宇宙に飛び立ち、
戦闘区域へと飛んで行った。

深緑の後継者は銀河の妖精を救う
ついに訪れた危機

深緑の後継者はその力を持って敵を迎え撃つ
そして、小さな歌姫と再び相まみえる……
運命の歯車は着々と回り始める……

第1話〱クロス・エンカウンター 後編〱（後書き）

お久しぶりです。
今回は短めです。
では、また次回……

第2話〜ハード・チェイス 前編〜（前書き）

この小説は、マクロスFにオリジナル主人公による本編再編成の小説です。

原作ヒロインキャラとオリジナル主人公にフラグが立ちます。上記のことに不快に感じる方は戻ることをお勧めいたします。

第2話　ハード・チェイス　前編

シオンが戦場に着いたときすでに、バジユラはフロンティアの中に侵入していた。

「ちっ、もう侵入してやがる」

「ネライウツ、ネライウツ！」

「ああ、そうだな！」

そう言つて、シオンはバジユラを追つてフロンティアの内部へと入った。

フロンティア内部へと入ったシオンの目の前には破壊された街が広がっていた。

「クソ、あいつら……！」

破壊された街を見て怒りをあらわにしたシオンは元凶であるバジユラを探した。

リーダーに反応があり、その場所に向かうとそこではバジユラに向かってガンポッドを乱射しているVF-25Fとそれを上空で見ているVF-25Sがいた。

「あれは、オズマ隊長にギリアム大尉か？　なんで、援護しないんだ？　っん」

バルキリーの足元に何かいるのを感じて、その部分のモニターを拡

大した。

「なっ！」

そこには、地面に座り込んで怯えているコンサート前にあった女の子がいた。

そして、バルキリーのガンポッドの弾が切れたのか、空回りをしていた。

「クソっ！ハロ、操縦任せた！！」

「リョウカイ、リョウカイ！」

シオンは、バトロイドになりながらハロにバルキリーの操縦を任せ、ライフル型のコントローラーを取り出し、バジュラに狙いを定めた。

「シオン・リン・ディランディ、目標を狙い撃つ！！」

可変式スナイパーライフルを使い、シオンはバルキリーの援護をしていたが、倒すまでにはいたらなかった。

そこへ、スカルリーダーであるオズマ・リーから通信が入った。

『シオン！俺がこの場を抑える！その娘とその素人を連れて逃げろ！』

オズマは、バジュラを押さえながらシオンに言ってきた。

「はあ！素人ってギリウム大尉が乗ってるんじゃないのか！」

シオンが驚いているのを無視してオズマは、

『その素人、そのバルキリーと一緒に逃げろ！』

と、バルキリーに向かって外線で言った。

「ああもう！その子、つかまれ！」

「えっ」

「はやく！」

「うわぁ！」

シオンは、バルキリーをバトロイドからガウォークにし、ライフルを折り、翼にマウントして、混乱している女の子をガウォークの手で掴んだ。

「おい、その素人！撤退するぞ！」

『あ、ああ……』

シオンの言葉に従い、バルキリーは撤退を始めた。

「よし、しっかり掴まってるよ！」

「う、うん……」

バルキリーの手で、女の子を包むようにしてシオンは機体を走らせ

た。

「シオン！かすり傷でも付けてみる、反応弾で蒸発させるぞ！」

「わかってる……！」

撤退しようとした時、新たなバジユラが現れ、シオンの機体に攻撃をしてきた。

シオンは、女の子を庇いながら、その攻撃を巧みにかわしていた。

「クソっ！おい、二手に分かれるぞ！」

『はぁ！』

シオンの言葉にバルキリーのパイロットは、驚きの声をあげた。

「このまま固まっていたもただの的だ！戦力を分断する！逃げるこ
とくらいできるだろ！」

『わ、わかった！』

そう言つて、シオンのバルキリーとバルキリーはお互いに違う方に
逃げた。

3体いたバジユラ全部がシオンたちを追ってきた。

「おいおい、なんで全部追ってくるんだよ！」

バジユラの攻撃を避けながら市街地を逃げていくが段々を追い詰め

られていくシオン。

「（くっ、このままじゃこの子が……！）」

両手が塞がり、攻撃ができないうえにバルキリーの手の中にいる女の子への負担を考えながら操縦しているシオンにとってバジユラ3匹の相手はあまりにも辛いことだった。

そんな中、シオンのバルキリーに通信が入った。

『シオン！大丈夫か！！』

「ミシエル！ナイスタイミングだ！！」

V.F. 25Gを操縦するミハエルからの通信だった。

「ミシエル！バジユラを頼めるか！」

『ああ、まかせろ！』

そう言ってミハエルのバルキリーはスナイパーライフルを構えた。

『シオン！当たるなよ！！』

「わかってるよ！相棒！」

ミハエルのバルキリーが放った銃弾がバジユラに当たり撃破した。

今だ追ってくるバジユラの攻撃を避けながらシオンはミハエルが狙撃しやすいようにバジユラを誘導して逃げて行った。

「ナイスだ、ミシェル！…っうお！？」

逃げた先にビルがあるのに気付き、機体をギリギリのところまで浮かして衝突を免れ、追ってきていたバジユラがビルに衝突した。

上空に逃れたシオンだったが、ビルから出てきたバジユラの攻撃を受けた。

「クソっ！」

何とか避けたシオンだったが、バジユラの攻撃は止むことなく続いた。

バジユラの目が光り、放たれた光弾により、女の子を掴んでいた腕を肘から切り落とされた。

「なっ！」

「た、助けてええええ！！！」

折しも、腕を切り落とした光弾によりフロンティアに穴が開いていた。

そこから、空気が宇宙へと吸い出され、女の子は上へ上へと落ちて行った。

「クッソオオオオオ！！！」

シオンはバルキリーをガウオークからファイターに変形させ、女の

子を追った。

「掴まれっ！！」

「う、うん…！」

ファイターからガウオークに戻り、キャタピラーを開き女の子に手を伸ばしたが、お互いにうまく掴めなかった。

「（あと少しっ！）」

しかし、指が少し触れたところで、女の子の身体は大きく離れて行ってしまった。

「きゃああああー！！！」

「間に合えっ！！」

シオンはEXギアを纏いコックピットから飛び出し女の子をキャッチして一氣に戻った。

女の子を抱えてコックピットに戻りフロンティアの内部に戻った時、先程のバジユラが、眼前に迫っていた。

「っ！？」

『詰めが甘いんだよ、シオン』

しかし、そのバジユラは、ミハエルの撃った銃撃によりギリギリのところまで撃破された。

「すまないミシエル」

『いいさ、後は任せろ』

「頼んだぞ、相棒」

『任せとけ、相棒』

シオンとミハエルはお互いに言葉を交わして通信を切った。シオンは、女の子を連れて安全な場所へ。ミハエルは残りのバジユラの撃退へと行った。

「大丈夫か？」

自分の膝の上で震えている女の子に言葉をかけた時、女の子はシオンの方を振り向いた。

「う、ひぐ、こわ……怖かった……！怖かったよぉっ……！」

瞳には涙があふれさせながら、ひしつ、と強い力で女の子はシオンに抱きついていた。

突如訪れた、女の子のやわらかな体の感触にシオンは狼狽したが、なんとか平常心を保った。

「ひっぐ……ひぐ……」

「もう大丈夫だ。大丈夫だから」

操縦を八口に任せて、女の子を落ち着かせるために、両手でしっかりと女の子を抱きしめてその翡翠色の頭を撫でた。

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……!？」

「え……あ……いや……」

落着きを取り戻した女の子は、顔をあげて目の前にあったシオンの顔に驚き、シオンは、女の子とのあまりにも近い顔の距離に顔を紅くしてまたしても狼狽してしまった。

「なんであたし……!？」

「あ、おい！」

混乱し、狼狽した女の子が抱きついていた腕をほどき、シオンから飛び退いた。

勢いのあまり、体勢を崩してしまった女の子を支えようとしたシオンだったが、その支えようとした手に、ほわん、とした柔らかい感触が伝わってきた。

「あっ」

シオンの手は、女の子の胸を触ってしまったていた。

「——っ！き、きゃあ——あああ——っつ！！」

フロンティアの夜空に、女の子の澄んだ悲鳴が木霊した。

フロンティアの街が見下ろせる小さな丘の上に、シオンのバルキリーは下りていた。

シオンは、女の子をバルキリーの下に降ろし、自分も降りた。

「よかった、ケガしてないみたいだな」

「えへへ、あたし一応ゼントラーとのクウォーターなんだ」

女の子が笑いながら言ってきた、シオンもつられて笑った。

「それにしても、今日は助けてもらってばかりだね！ホントにホントにありがとう！」

「いや、気にするな」

「そう？」

「ああ」

そう言いながら、シオンは女の子を頭を撫でた。

その行為に、女の子は顔を赤くして俯いてしまった。

『シオン、撤退命令だ！合流しろ！』

「シオン、シオン！」

ミハエルから撤退の通信が入り、ハロがシオンを呼んでいた。

シオンは、女の子の頭を撫でていた手を離してバルキリーへと向かった。

先ほどまでであった温もりがなくなったためか、女の子は、名残惜しそうに顔をしていた。

「すまない、行かなきゃ行けなくなった」

「うっん、しかたがないよ。……そうだ！」

「ん？」

「名前……名前教えて！あたしはランカ…ランカ・リー！」

ランカと名乗った女の子は、バルキリーに乗ろうとしていたシオンの手を掴み、そう言った。

リーというファミリーネームに違和感を覚えたシオンだったが、その考えを頭の隅にやって、ランカの問いに答えた。

「シオンだ。シオン・リン・ディランディだ」

そう言って、ランカの方を一瞬見てからシオンはバルキリーに乗り飛び立った。

「シオンくん、また会えるよね？」

シオンが飛び立った空を見つめながら呟いたランカの言葉は荒れ果てたフロンティアの空に溶けていった……

フロンティアに訪れた危機は回避された
戦いの中、深緑の継承者は小さな歌姫を救う
深緑の継承者と小さな歌姫は互いの名を知る
だが、再び訪れる危機までの時間はそう遠くはない……

第2話〜ハード・チェイス 前編〜（後書き）

お久しぶりです。

テストなどがあり、更新が遅れてしまいました。

今回は、主人公とランカが再会し、

お互いの名前を知るところでした。

この更新スピードだと

本編での最後のヒロインの登場はいつになるんだろう……

ではまた次回

主人公紹介

名前：シオン・リン・ディランディ

性別：男

年齢：18歳

身長：177?

特徴：藍色の少しウェーブがかかった髪を肩かかるくらいまで伸ばしている。

搭乗機：VF-25D

その他：10歳から17歳の時までマクロス7の叔父の所で暮らしていたが

元々はフロンティア出身。

クラン、ミハエルとは幼馴染の間柄。

S・M・Sに所属しており、階級は中尉。

近・中・遠距離とオールラウンドにこなす。

両親はプロトカルチャーの研究者でシオンが9歳の時に研究で出て行ってから

帰ってない。

CV 三木 眞一郎

VF-25Dメサイヤ

シオンが搭乗する機体で星間戦争で活躍したある人物の機体の兵装である

ライフル型コントローラー、可変式ライフルなどが採用されている。独立AIを搭載したペットロボット型情報端末ハロがコックピットに搭載されており

狙撃時には操縦支援を行ってもらっている。

色は、白をベースに所々に深緑が入っている。

主人公紹介（後書き）

お久しぶりです。

本編の執筆に手間取っております。

ですので、今回はオリ主の紹介を……

微妙に濁しているところは、本編が進んでからで……

番外編で、00セカンドシーズンで悲しき最後を迎えた

アニユーさんを出そうと思うのですがどうでしょうか？

意見待っています。m（＿）m

劇場版 予告? (前書き)

この小説には、本編のネタバレや、公開中の映画マクロスF、イツワリノウタヒメのネタバレ等が含まれております。

上記のことに不快に感じる方は戻ることをお勧めいたします。

劇場版 予告？

西暦2009年人類史上初の星間戦争により滅亡の危機に瀕した地球人類は、種の存続を主眼に置き、新天地を求めて銀河の各方面へと旅立っていった。

数えて25番目となる長距離移民船団それが……

全銀河が見守った！？

あの、深緑の後継者の物語
ついに劇場化！！

もう一つの…新たなストーリー

「また、助けてもらったわね……」

「ありがとうアルト、シオン……ランカちゃん。……私はひとりぼっちじゃないってわかったから」

シェリル・ノーム
誇り高き 銀河の妖精

「あたし…いや、こんなことできない!!」
「あたし、みんなに伝えたいの!だから聴いてくれる?あたしの歌
!」

ランカ・リー
ひたむきな 超時空シンデレラ

「こんなところにいたのか…」
「お、お前のことだからわかるんだ!!」
克蘭・克蘭

ゼントラーの血を受け継ぐ 気高き女戦士

「あまり無茶しないでね……」
「やっぱり…血は争えないみたいね……あの人そっくり」
アニユー・リターナー
愛する者を思い散った なり損ないの革新者

「俺は、銀河の果てまで狙い撃つ男だぜ?」
「もう…誰の命も…絶対に…散らせるかあ!!」
シオン・リン・ディランディ
伝説の英雄たちを家族に持つ 深緑の騎士

劇場化に伴い新たに構成されるストーリー!

新たに追加される機体たち！

V F 2 5 D メサイヤ デュナメスパック！

そして……

劇場版マクロスF^{マボロシノキシ} 虚空騎士^{マボロシノキシ} 予告篇

「シェリルがスパイ……？」

劇場版 予告？（後書き）

お久しぶりです。

本編書かないで何やってるんだ！！

と思われているでしょう。

先日、劇場版を見に行き、勢いで書いてしまいました。
ものすごく楽しかったです。

本編が終わり次第書きたいと思っています。

これを書くのはいつになるのやら……

第2話〜ハード・チェイス 後編〜（前書き）

この小説は、マクロスFにオリジナル主人公による本編再編成の小説です。

原作ヒロインキャラとオリジナル主人公にフラグが立ちます。上記のことに不快に感じる方は戻ることをお勧めいたします。

第2話　ハード・チェイス　後編

バジユラの襲撃を受けた翌日、フロンティアの街にはその爪痕が残されていた。

その後、S・M・Sに戻ったシオンは整備班に機体の修理を頼んでミハエル達と話していた。

「でも、珍しいですね。シオン先輩が被弾するなんて」

修理をしているシオンのバルキリーを見ながらルカは珍しいといった感じの顔をしながらシオンに言った。

「ん？ああ……」

考え事をしていたのか、シオンは曖昧な返事しかできなかった。

「考え事か？」

「ああ、あの子のこと……こう、なんか引つかかるんだよ」

幼馴染の勘か、ミハエルが聞いてきたのに対して、シオンはずっと考えていたことを話した。

「あの子……ああ、ランカちゃんのことか」

「そうだけど……って、何でミシェルがランカのこと知ってるんだ？」

シオンは、ミハエルがランカのことを知っていることに驚いた。

ミハエルは、そんなシオンに笑いながら、さらに驚愕の事実を口にした。

「ああ、シオンは知らなかったっけ？ランカちゃんはオズマ隊長の妹だぞ」

「……はあああ……！？」

バルキリーの修理や補給で忙しい格納庫の中にシオンの驚きの声が木霊した。

シオンが驚いていたところ、ランカはオズマに連れられて病院で検査を受けていた。

ランカは検査も終り、着替えた後、待合室で待っていたオズマに不満を漏らしていた。

「なんであたし、検査なんかしなきゃならなかったの？全然元気なのに……」

「念のためさ。それより、注射で泣いたりしなかったか？」

「子供扱いしないでよー!」

ランカは、子供扱いしてくるオズマに対して、少し怒った風に反論した。

「それよりお兄ちゃん、さっきの話、忘れないでよね」

「ああ……シオンね……」

「うん。お兄ちゃんの会社の人か、軍人さんかわからないけど、お兄ちゃんなら調べられるでしょ？人事部なんだし」

あまり乗り気ではないのか、いやな顔をしているオズマに対して、ランカは、顔を近づけ迫るように言ってきた。

「しっかしな……あいつも忙しいし……」

「知ってるの!」

ポツリとつぶやいた言葉にランカは反応してさらに迫ってきた。

オズマは、自分の犯した失態に気づき頭を抱えなくなった。

「ねえねえ、お兄ちゃん」

甘えるような声で迫ってくるランカに、ついにオズマは折れた。

「わかったよ、言っておいてやる」

「ありがとうお兄ちゃん!!お礼に今日も差し入れ持っててあげる

から！」

そう言って笑顔を見せながらランカは病院から出ていった。

そんなランカに、オズマは笑いながら手を振っていた。

そして、この後オズマは先日、ギリアムのバルキリーに乗っていた素人、早乙女アルトと再会する。

「ない、ないわ、此处でもない！あゝもう！違う！違う！」

とあるホテルの一室でシェリルはマネージャーのグレイス・オコナ
ーの話を無視して、自分の荷物を広げて何かを探していた。

「聞いてます？シェリル？」

「昨日のライブビデオは！」

「まだ届いてませんけど……」

「でもあなたは、見てたでしょグレイス！！」

シェリルは、グレイスに向かってそう言った。

そして、ライブビデオを見たシェリルは、キャサリン・グラスに電話をして、無理な注文をしていた。

『なぜ、そんなことを……？』

「いいから教えて、アクロバットをやっていたシオン・リン・ディランディって子が今いる場所。立ち入り禁止！そんなの無意味よ、私はシェリルなのよ！」

着替えながら電話をしているシェリルの目の前にあるテレビには、あの時ライブで、シェリルを抱えながら飛んでいるシオンの姿が映っていた。

しばらくして、部屋に来た 그레이スは、部屋の光景を見てため息をついた。

『ごめん 그레이ス。ちょっと外出してくる。仕事までには必ず戻るから。』

愛してる。シェリル』

そして、 그레이スの後ろの鏡には、口紅でシェリルからのメッセージが書かれていた。

その頃、シェリルは、キャサリンに教えてもらった場所を変装をして探していた。

「えーと、297、297…297区画地下……どこなのよ！わかりにくい！」

教えられた場所が見つからず、思わず怒鳴ってしまい、後ろにいたロボットは驚いてしまった。

その時、シェリルの耳に歌声が聞こえてきた。

「飛び越えろ！ 腹ペコなの！ 次のステージ……」

シェリルが歌が聞こえてきた方を見ると、オズマへの差し入れをもったランカが、シェリルの歌を歌いながら走っていくのが見えた。

「ああ、ちよつとそこのあなた！」

「はい？」

シェリルは、ランカを呼び止め、ランカは不思議そうに振り返った。

それは、銀河の妖精と小さな歌姫の出会いの瞬間だった。

シオンがランカの正体を知り、絶叫してからしばらく経った頃、オズマがアルトを連れてきていた。

ミハエルと一緒にルカのパソコンを覗いていたシオンは、人が集まっているのに気付いた。

ミハエル達と共に、人だかりになっているところに行くと、ルカが近くにいたカナリア・ベルシュタインに話しかけた。

「カナリアさん！なんです、この騒ぎ？」

「連れてきた。オズマが…ギリアムの見届け人」

カナリアの言葉に、シオンとミハエルは人だかりの中心を見るとそこには二人のよく知っている人物、アルトがいた。

「って！？アルト！！」

「え、ええええ！？」

「おいおい、マジかよ……」

ミハエル、ルカ、シオンは三者三様の驚きを見せた。

「ミハエル、シオン、ルカ！？」

そして、アルトも3人がいることに驚いているようだった。

『ミッションコードヴィクター、繰り返すコードヴィクターを発令する！』

突如、警報が鳴り、空間モニターにMISSION:CODE VICTORという文字が現れてアルトの周りにいた人達が、自分の持ち場へと戻っていった。

「スカル小队！出撃準備！」

「了解!!」

オズマの号令にシオンたちは敬礼をして答えた。

「シオン、お前は残れ」

「な、なんで!?!」

が、シオンだけはオズマに待機を命じられた。

「お前のバルキリーはまだ修理中だろ……」

「あつ……了解」

オズマの言葉に反論しようとしたシオンだったが、自分の機体の状態を思い出ししぶしぶ待機命令を承諾した。

それを見届けて、オズマはパイロットスーツに着替えに向かった。

その場に残ったシオンとアルトの間には沈黙が流れていた。

「なんで……」

「んっ?」

その沈黙を破り、アルトがシオンに話しかけた。

「俺に、俺たちに黙って戦争屋のアルバイトをしていたんだ……」

「守秘義務があるんでね。お前を信用するしないの問題じゃないんだ」

さらに何かを言い返そうとしたアルトの目に、始めてみるシオンの雰囲気と言っのをやめた。

整備員たちが入り乱れる格納庫の中、二人の間にはいやな空気が流れた。

そんな中、パイロットスーツに着替え終えたオズマが二人の近くを通った。

「おい！俺をバルキリーに乗せろ！！」

アルトが、オズマにそう言った次の瞬間アルトはオズマに殴られ宙に舞った。

「あゝあ……」

シオンは、右手を顔に当てて呆れているように言った。

「ノリでほざいてんじゃねえ、ガキが！！シオン、こいつを連れて安全区域まで行け！！」

「了解……行くぞ、アルト」

シオンは、アルトに近づき手を貸して立たせ、自分の荷物を持ち、出口へと向かって行った。

「どうしてあんなこと言ったんだ？」

「……」

「はあ……」

S・M・Sを出て、シオンとアルトはグリフィス・パークの近くにいた。

シオンはアルトに先程のことを聞いたが、アルトは黙ったままだった。そんなアルトの姿にシオンはため息をついた。

「……」なら、せめて最後に　もう一度抱きしめてほしかったよ」

その時、二人の耳に歌が聞こえてきた。

「っん？」

「……（ダイヤモンド・クレパス……それに、この声は……）」

二人は、その歌が聞こえる方へと行ってみると、そこにはシオンが先日助けた少女、ランカと一人の歌姫がいた。

「お前たち……」

アルトがそう呟いた時、ランカが二人に気がついた。

「あつ、シオン君!!」

「よう、ランカ」

シオンを見て、嬉しそうに名前を呼んだランカに対して、シオンも名前を呼んで答えた。

「見つけたわ!シオン・リン・ディランディ!!」

「「「えっ?」」」

シェリルが、シオンに向かって叫び、シオン達は思わずシェリルの方を見た。

その時、シオン達の頭上、宇宙そらにバジュラが現れた……

空を目指す少年は、友の仕事を知る

小さな歌姫は銀河の妖精との出会いを果たす

そして、出会いの丘で物語の主役たちは会合を果たした

しかし、新たな危機はそこまで迫っている……

それがもたらすものとは……

第2話〽ハード・チェイス 後編〽（後書き）

あけましておめでとうございます。

大変長らくお待たせしました……

一ヶ月ぶりの本編更新です。

なんだかんだで、スランプでした……

この調子だと、月2〽3くらいかな……

第3話　オン・ユア・マークス　前篇

「きゃああー！ー！ー！ー！」

宇宙に見えたバジユラの姿を見てランカは悲鳴を上げた。

バジユラはそのまま外壁を破ろうとして腕を振り上げた。

『やらせん！！』

そこに、オズマのVF-25Sが割り込み、バトロイドになりガンポッドを乱射した。

しかし、バジユラは一瞬怯んだだけですぐに仕返しとばかりにその強靱な腕でバルキリーを強打した。

『ぐあつ！！』

「隊長！！」

その光景を見たランカは、恐怖からか隣にいるシオンの服を掴んで身を寄せ、シオンは、オズマがやられたのを見て声を荒げた。

オズマのバルキリーは、弾き飛ばされながらも体制を立て直し、バジユラを捕まえた。

しかし、バジユラは抵抗しながら、辺りに機関砲を乱れ撃っていた。

「（おいおい、冗談じゃないぞ）」

シオンは、内心焦っていた。

戦いに参加できない焦燥感と相まってのこの状況。

宇宙で戦っているオズマには悪いと思うがもう少し場所を考えてほしい。そう思っていた。

そんな中、苦戦するオズマのもとに、青と緑のバルキリーが来た。

「（ルカにミシエルか！これなら……）」

ミハエルの乗るVF-25Gが、機体を固定させてオズマ機が抑えているバジュラの頭を撃ち抜き、バジュラは動きを止めた。

「（よし！さすがだミシエル）」

「当てやがった……クッ」

シオンは、声に出さずにミハエルに賛辞を送り、アルトは、その光景を悔しそうに見ていた。

『よくやったミシエル』

『当然のことでした。隊長。それに、シオンもこれ位はできますよ』

『ふっ、後で一杯奢ってやるぜ』

ミハエルはオズマに軽い口調で答え、オズマもそれに軽く答えた。

その時、倒したはずのバジユラが再び動き出した。

『んん、何っ！』

バジユラは、オズマのバルキリーを掴み、投げ飛ばした。

そして、投げ飛ばしたオズマ機に向かって機関砲を撃った。

『ぐわああーーーーー』

オズマ機は、当たりの浮遊物の爆発に巻き込まれた。

『「隊長！！」』

シオンとRVF、25に乗るルカは同時に叫んだ。

オズマ機を撃破したバジユラは、シオン達の方に身を翻し、強化ガラスに突っ込んできた。

「やめてよ！冗談じゃない！」

シェリルの叫びも虚しく、バジユラは強化ガラスに穴を開けた。

「くそっ！」

シオンは、辺りを見回しどこか安全なところはないかと探した。

「シオン、シェリルこっちだ！」

シオンと同じように辺りを見回していたアルトがシエルターを見つ
け、シェリルの手を掴んで走った。

「ナイス、アルト！ランカ、これ持ってて！」

「えっ、シオンくん？きゃっ！」

シオンも、ランカに自分の荷物を持たせランカを抱えて走った。

先に着いたアルトがシェリルと共に飛び込み、それに続くようにシ
オンもランカと共に飛び込んだ。

「何なのよ、一体……」

「知るかよ。クソっ」

シェリルの言葉に、アルトは苛立ったように返した。

「あいつに、また助けられるなんて」

「何だアルト。ミシエルに助けられたのが気に食わないのか？」

苛立ちを隠せない態度のアルトにランカを抱えたままのシオンがそう言った。

「悪いか！」

「あんまり叫ぶな。ランカが怖がつてるだろ」

シオンの目を落とした先には、シオンの服にしがみついたままのランカがいた。

それに気づいたアルトは、渋々言葉を紡いだ。

「大丈夫かランカ？」

「うん、ありがとうシオン君」

ランカの頭をなでながらそう言ったシオンに顔を赤くしたランカ。

「怖がつてる女の子に俺が守ってやるとか言えないわけ？」

「うるせえな！言える状況だったら、いくらでも言ってるよ！」

「アルト！」

「！……チッ」

シェリルの言葉に、怒ったアルトは再び怒鳴ったが、シオンの一括で舌打ち押しながら黙った。

「あなたは落ち着いているのね。シオン・リン・ディランディ」

「まあな。これでも一応軍人だからな」

何かを見定めるようなシェリルの視線を感じながらシオンは答えた。

「ふーん。それよりとつと出ましよう。その方がお互いの精神衛生上良さそうだし」

立ち上がり、その場から出ようとするシェリル。

「無理だ」

しかし、アルトの言葉に足を止めた。

「ここは非常用の待避壕だ。ドーム内には通じてない」

「ちょっと！それって、閉じ込められたってこと！」

アルトの言葉に、叫びをあげるシェリル。

「ほ、本当なのシオン君……」

「残念ながらね」

二人を見ながら、不安そうにシオンに聞くランカ。

聞かれたシオンは、首を振りながら告げた。

「そんなあ」

シオンの言葉にランカは髪の毛を犬の耳の様に垂れ下げながらうなだれた。

どれくらい時間が経ったのか、シエルターの中は時間が経つにつれて温度が上がってきていた。

シエリルは上着を脱ぎ、アルトは制服のネクタイを緩めていた。

シオンは、俯いているランカの頭をなでていた。

「たくつ、暑いわね」

「余計に暑くなるぞ」

「うるさいわね……」

シオンの言葉にシエリルが文句を言った時、シエルターが大きく揺れた。

シオンは咄嗟にランカを抱きしめて自らを下敷きにした。

ちなみにアルトは、倒れて来たシエリルのビンタを食らっていた。

「何なのよ、もう……」

「っ痛、大丈夫かランカ？」

「う、うん。ありがとうシオン君……シ、シェリルさん!!」

抱きとめられたランカは顔を赤くしながらお礼を言ったが、アルトたちの方を見て声を上げた。

「?……何だ」

シオンが、アルトとシェリルの方を見ようとした時

「シオン君！見ちゃダメえー!!」

「ンガっ?!」

シオンの視界を塞ごうとしたランカの頭が、シオンのあごに入った時、

アルトは、シェリルのはだけた胸を見てビンタをを食らっていた。

「……痛い」

「ご、ごめんね。シオン君」

あごを擦りながらそう言うシオンに、ランカが謝っていた。

「いや、別にいいんだけど……あれ、なしたの？」

「えっと…その…」

そう言つて、シオンはアルトとシェリルの方を指さしてランカに聞いた。

「あたしの生で見たのよ！そのぐらい安いと思いなさい！」

「ぬかせ！大体、ステージとかでいろいろ見せてんだろ！！」

アルトのその言葉に、シェリルは顔を赤くして

「それとプライベートは別なの！いやらしい目で見ないでよ、この変態！」

「誰が変態だ！」

「あんたよ！この色ガキ！」

「黙れ露出魔！」

「なんですって！」

二人の言い争いを見ながら、どうしたものかとシオンは頭を抱え、ランカはオロオロとしていた。

「あっ！」

その時、ランカは何かを見つけ声をあげた。

全員がランカの方を向き注目していた。

「お、お腹空きませんか？あたし偶々すっごく美味しい点心を持ってるんです。

娘々名物まぐる饅！」

場の空気を和ませようとして出したまぐる饅だったが、明らかにその形状は、空気を読んでいなかった。

「や、やっぱり腹が減っては戦ができないってゆーか、閉じ込められたら……その……まぐる饅みたいないな……その……」

語尾がだんだんと小さくなり、恥ずかしいのか、ランカは少し俯いてしまった。

「ぷ、あははっ！やっぱりかわいいわ、あなた」

声を出して笑うシェリルと声をこらえて笑うアルト。

「ククク、最高だよランカ」

シオンは、ランカの頭をなでながらそう言った。

ランカは、顔を赤くしながらさらに顔を俯かせた。

「ん、これならどうだアルト？」

「いや、駄目だ……」

「そうか……」

アルトがいじっている端末に、持っていた軍用の端末を繋げて出口を開けようとしていたシオンだったが、結果輪駄目だった。

「はあ、こんな時に限ってハロは、バルキリーの修理のために置いてきちまってるしなあ……」

今はいない相棒のことを考えながら端末を再びいじりだした。

「ねえ、ハロってあのロックオン・ストラトスの相棒の？」

「……いや、レプリカだよ」

シェリルの言葉に、一瞬の間をおいてシオンは答えた。

「SMSの人たち大丈夫かな」

「知り合いがいるのか？」

「お兄ちゃんが事務で働いて……あたしもよく差し入れに……」

「その割に、俺と会ったことがなかったよな」

「あつ、そうだね……部署が違うからかな？」

ランカは、かわいらしく首をかしげながら言った。

シオンは、そんなランカからアルトに目を移した。

アルトは何かを呟きながら右手を握りしめていた。

シオンはアルトの行動に眼を鋭くした。

「（アルト、お前はどうするんだ……？）」

あれからしばらく経ち、シオンとアルトは相変わらず端末をいじっていた。

そんな中シェリルの言葉が漏れた。

「ねえ、なんか空気悪くない？」

「皮肉ならもうやめろよ」

アルトはシェリルの言葉に対して皮肉気に反した。

「違うわよ……本当に息苦しいような」

「シェリルの言ってることは正しいぞ……循環系が停止してる」

シオンが端末をいじりながら言った時、シエルターに衝撃が走った。

「くそっ、このままじゃ15分も持たない……！」

「なんとかしなさいよ！あなた軍人でしょ！」

「やってるだろ！アルト、そっちはどうだ？」

「ダメだ、完全にいかれてる」

シオンとアルトが必死に端末をいじっていた。

「冗談じゃないわよ！」

「えっ」

そんな中、シェリルは一人出口へと向かって行った。

「おい、バカやめろ！外は真空だぞ！」

「なら、あきらめて窒息するまで待てっての？そんなの御免よ！」

シェリルは、端末をいじりながら独白する。

「私はあきらめない。みんなは私を幸運だって言うわ……でも、そ

れに見合う努力はしてきたつもりよ!」

そう言いながらシェリルは梯子に手をかけた。

「だから私は、シェリル・ノームでいられるの!運命つてのはそうやって掴み取るものなのよ!」

シェリルの言葉をシオン、ランカ、アルトは呆然と聞いていた。

そして、シェリルが梯子をのぼりはじめた時

『その通りです』

と声が聞こえ、ハッチが開いた。

ハッチが開いた先には、 그레이スとキャサリン、そして、数名の兵士がいた。

シェリルは、 그레이スの顔を見て安堵の表情を浮かべた。

救出された少し後、シオン達は、シェリルの迎えの車の前でシェリルと話していた。

「いい、さっき見たことは忘れるのよ。あんたがもしさっきの視覚データをネットに流したりしたら、社会的にも生物学的にも抹殺するわよ」

シェリルはアルトに対してそう言っ て車に乗り込んだ。

さらにアルトに対して何か言っ てるようだったが、少し離れた所にいたシオンは他のことで頭がいっぱいだっ た。

「（隊長、大丈夫だろうか…… もう、S・M・Sのに戻っ てるかな……）」

「大丈夫でしたか？シオン君」

「キャサリンさん…… ずいぶんと遅い救助でしたね」

「それについては謝罪をするわ。でも、あなたが緊急用のアラームを忘れるのも悪いのよ」

P・P・P・P

ちょうど、シェリルと話し終えたアルト達が近づいてきたとき、シオンとキャサリンの携帯が鳴っ た。

「はい、シオンです」

『先輩！オズマ隊長が！！』

「ルカ！隊長がどうかしたのか！」

「オズマ少佐が負傷!!」

シオンが、ルカに対して聞いたと同時に、キャサリンの音が響いた。

それと同時に、上空にミハエル機とルカ機に支えられたオズマ機の姿が現れた。

「ああ!!」

そこからは、負傷したオズマの姿も見えた。

「オズマ……」

「隊長……」

「いやあ!!」

負傷したオズマの姿を見たランカの悲鳴が響き渡った。

「お兄ちゃん……」

「あなたまさか……」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん!!」

ランカは、運ばれていくバルキリーの後を追ったが、外壁によって阻まれた。

「なんで怪我してるの!!パイロットはやめたって!!もう絶対あたし

を一人に……危ないことしないって言ってたのに!!」

「ランカ……」

「死んじゃダメ……ダメだよお兄ちゃん。どうして、どうしてそんなことするの! あたしあのことちゃんと内緒にしてるよ! だから、いや、いやぁー……!!」

ランカは叫びながら気を失った。

「ランカ!」

気を失って倒れそうになったランカをシオンがギリギリで抱きとめた。

「キャサリンさん! 車回して! 早く!」

「わかったわ!」

シオンはランカを横抱きにして抱えて車の方へと向かった

第3話〱オン・ユア・マークス 前篇〱（後書き）

1年ぶりの更新です。

劇場版マクロスF サヨナラノツバサを見て勢いで書きました。
楽しんでくれたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5298i/>

マクロスF～深緑の継承者～

2011年3月1日08時38分発行